

清末の「東アジア史」教科書 —その日本史認識を中心として—

土屋 洋*

目次

はじめに

1. 清末の「東アジア史」教科書
2. 秦瑞玠著『蒙学東洋歴史教科書』
3. 商務印書館編訳所編『最新東洋歴史教科書』

おわりに

はじめに

東アジアにおいて歴史教科書の問題が叫ばれて久しい。この問題が東アジア各国間における歴史認識の相違に由来することは言うまでもあるまい。しかしながら、こうした歴史認識の相違がいかんにして生じたかについては、90年代以降の日本の歴史修正主義の動きや中国の愛国主義教育の問題が指摘されることはあっても、それ以前のより長期的な東アジアの「歴史認識の歴史」が顧みられることは少ないのではない。

本稿は近代中国で編纂された「東アジア史」教科書について¹、特に清末期に編纂された教科書に焦点を絞って、その内容および編纂の背景を探るものである。これまで日本の東洋史教科書が翻訳、改編を伴いながら中国の自国史教科書の編纂に影響を及ぼしていったことはすでにいくつかの研究によって明らかにされている²。しかし、中国の「東アジア史」教科書については、それが近代中国のアジア認識を映し出す重要な史料であるにも関わらず、その研究は近年ようやく緒に就いた

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科東アジア国際協力・教育研究センター准教授

¹ 本稿のいわゆる「東アジア史」教科書とは、清末に「東洋歴史教科書」、民国初に「東亜各国史教科書」等と称された一連のアジア史教科書を指す。なお、学制の科目名としては、清末は「亜細亞洲史」が、民国初は「東亜各国史」が中学に設置され、1920年代のいわゆる壬戌学制以降は「世界史」ないし「外国史」に吸収・合併された。

² 李孝遷「清季支那史、東洋史教科書介説初探」（『史学月刊』9、2003年）、鈴木正弘「清末における「東洋史」教材の漢訳—桑原隲蔵著述「東洋史」漢訳教材の考察—」（『史学研究』250、2005年）、黄東蘭「桑原隲蔵東洋史教科書とその漢訳テキスト『東亜史課本』との比較分析を中心に—」（愛知県立大学外国語学部『紀要 地域研究・国際学編』43、2011年）、同「「東洋史」から「中国史」へ—桑原隲蔵『中等東洋史』と陳慶年『中国歴史教科書』の比較から—」（古垣光一編『アジア教育史学の開拓』アジア教育史学会、2012年）等。

ばかりである³。

しかも、これらの教科書は、そこに日本史が少なからず描かれているため、近代中国の日本史認識を窺う上で貴重な史料たりうる⁴。もとより、当時の中国の教科書には日本の教科書から受けた影響が小さくなかったため、後述する通り、本稿が取り上げる「東アジア史」教科書もまた、そのかなりの部分が日本の東洋史教科書や日本史教科書を下敷きにしていた。しかし、それが単なる引き写しであったのか、それとも中国側独自の観点を加えるものであったか否かは、慎重に吟味すべき課題であろう。というのも、この点は近代日中の歴史教科書がその当初において歴史認識を同じくしていたのか、それとも異にしていたのか、という問題に直接関わるからである。

以下、まずは清末の「東アジア史」教科書について概観し、その後、それぞれの教科書について具体的な考察を行いたい。なお、本稿が取り上げる教科書は、より多くの人々の歴史認識を代表したであろう小学ないし中学レベルの教科書を中心とする。

1. 清末の「東アジア史」教科書

清末期の中国では、日清戦争以降改革が本格化し、とりわけ義和団事件後に進められた光緒新政によって1000年以上続いた科挙が廃止され、一方で近代の学校制度の創設を目指す新たな学制が發布された。ここで發布された「欽定学堂章程」（1902年）と「奏定学堂章程」（1904年）によって学科の一つとして設置されたのが、「歴史」科であった。この歴史科では、中学で「亚洲各国史」を講じることとされ、日本および朝鮮、ベトナム、タイ、ビルマの歴史を中心とすること、近代史を中心として今日の「西方」による「東方」侵略の危局を示すこと等が規定された⁵。こうした動きに前後して編纂されたのが、本稿のいわゆる「東アジア史」教科書である。

上述の通り、当時、日本の学者の手になる東洋史教科書が少なからず漢訳され、草創期における中国の学校教育で用いられていた。しかし、これらの教科書が自国史たる中国史の教育に用いられようとしていたのに対して、「東アジア史」教科書は、学制の規定に見える通り、中国史以外のアジア史教育に用いられたものであった。後述の通り、この「東アジア史」教科書は日本の東洋史教科書と密接な関係を有したが、中国から見たアジア史を描き出す点で、日本から見たアジア史を描く日本の東洋史教科書とは本質的に異なっていたのである。

³ 近代中国の教科書からそのアジア観を探る貴重な研究として、白永瑞『思想東亜—朝鮮半島視角的の歴史与实践—』（三聯書店、2011年）、263-278頁、徐冰『中国近代教科書中の日本和日本人形象—交流与冲突の軌跡—』（商務印書館、2014年）参照。

⁴ この当時、日本史の漢訳書はすでに現れていたが、中国人の手によって本格的な「日本史」が描かれるのは、章柳泉『日本小史』（1926年）、陳恭祿『日本全史』（1927年）、李宗武『日本史ABC』（1929年）等が現れる1920年代を待たねばならない。法政大学国際日本学研究所編『（国際日本学叢書9）中国人の日本研究—相互理解のための思索と実践—』（法政大学国際日本学研究中心、2009年）、33-61頁。

⁵ 『奏定中学堂章程』（1904年）、今瓊鑫・唐良炎編『中国近代教育史資料彙編 学制演変』（上海教育出版社、1991年）、321頁。

表1 『蒙学東洋歴史教科書』目録

| | | | |
|-------------------|--------------------|-------------------|---------------------|
| 第一篇 上世史 | 第三章 高麗百濟之亡及新羅一統 | 第十九章 日本南北一統及足利氏之横 | 第三章 印度莫臥兒帝国之亡 |
| 第一章 印度古代之情勢 | 第一節 唐滅高麗百濟 | 第一節 北朝勝勢 | 第一節 馬拉他人之寇陷 |
| 第一節 種族遷徙 | 第二節 唐服新羅 | 第二節 足利義満 | 第二節 英吉利之蚕食 |
| 第二節 族制階級 | 第四章 日本中世文化 | 第二十章 安南分合 | 第四章 日本之幕府傾覆及王政復古 |
| 第三節 宗教文化 | 第五章 新羅分裂及後高麗国起 | 第一節 黎朝兩分 | 第一節 四国劫盟 |
| 第二章 日本建国 | 第一節 朝鮮三分 | 第二節 中興一統 | 第二節 安政大獄 |
| 第三章 印度仏教之興起 | 第二節 高麗一統 | | 第三節 志士急進 |
| 第一節 婆羅門教之弊 | 第六章 安南建国 | 第三篇 近世史 | 第四節 朝幕修和 |
| 第二節 釈迦創仏教 | 第一節 安南沿革 | 第一章 印度莫臥兒帝国起 | 第五節 幕府征長 |
| 第四章 波斯希臘之印度攻略 | 第二節 統前 | 第二節 統前 | 第六章 徳川幕政 |
| 第一節 外寇入侵 | 第七章 回人侵入印度 | 第二章 統一印度 | 第五章 日本明治維新諸要政 |
| 第二節 摩迦陀王逐希臘人 | 第一節 阿富汗回部之強 | 第一節 亜格伯雄略 | 第一節 王師東征 |
| 第三節 摩迦陀王奉仏教 | 第二節 印度攻畧 | 第二節 莫臥兒帝国之極盛 | 第二節 廢藩置県 |
| 第五章 朝鮮衛氏之興亡 | 第八章 日本藤原氏時代 | 第三章 日本応仁之乱 | 第三節 外交内治 |
| 第一節 衛氏之興 | 第一節 外戚之盛 | 第四章 日本戦国時代及織田氏興廢 | 第六章 日本立憲政体之確定 |
| 第二節 衛氏之亡 | 第二節 統前 | 第一節 織田氏代足利 | 第一節 西郷及大久保之党争 |
| 第六章 高句麗諸国之興 | 第九章 日本保元之乱 | 第二節 織田信長志業 | 第二節 国会請求之舉動 |
| 第一節 創業先後 | 第一節 院政及武士 | 第五章 日本豊臣氏時代 | 第三節 鹿兒島之乱 |
| 第二節 三国鼎立 | 第二節 崇徳復辟 | 第一節 内乱之削平 | 第四節 憲法之發布 |
| 第七章 大月氏之盛及仏教東行 | 第十章 日本平氏時代 | 第二節 朝鮮之征伐 | 第七章 緬甸滅亡之概略 |
| 第一節 仏教与大月氏關係 | 第一節 平治之乱 | 第六章 日本徳川開幕時代 | 第一節 海岸割棄 |
| 第二節 仏教伝入東亜 | 第二節 平氏專政 | 第一節 關原之戰 | 第二節 国都破陥 |
| 第八章 日本征服三韓 | 第十一章 日本源平二氏之興亡 | 第二節 封建制度 | 第八章 安南吞併之概略 |
| 第一節 熊襲之叛 | 第一節 源賴朝兵起 | 第三節 大阪之役 | 第一節 西貢及柬埔寨之役 |
| 第二節 神功皇后之征略 | 第二節 平氏滅亡 | 第四節 文学興盛 | 第二節 黒旗軍及北圻之乱 |
| 第九章 日本古代文化 | 第十二章 日本鎌倉幕府時代 | 第五節 各国交通 | 第九章 暹羅外交及変法之効果 |
| 第十章 印度加奴侍国恢復婆羅門教 | 第一節 武家政治之創建 | 第七章 安南復分及阮氏一統 | 第一節 英法外交 |
| 第十一章 朝鮮三国之紛争及中日關係 | 第二節 幕府之沿革 | 第一節 広南国起 | 第二節 変法自強 |
| 第一節 日本之三韓交渉 | 第十三章 日本北条氏時代 | 第二節 西山賊起 | 第十章 朝鮮大院君之政略及其事変 |
| 第二節 朝鮮三国建立後大勢 | 第一節 承久之変 | 第三節 安南黎氏亡 | 第一節 各国外交 |
| 第三節 高句麗之強盛及中国交渉 | 第二節 海戰元兵 | 第四節 阮氏統一安南 | 第二節 王都内乱 |
| 第二篇 中世史 | 第十四章 北条氏及鎌倉幕府之覆亡 | 第八章 緬甸勃興 | 第十一章 朝鮮甲申事変及東学党之乱 |
| 第一章 印度烏菴国起及文運再興 | 第十五章 足利氏起及南北朝対立 | 第九章 暹羅新国起 | 第一節 金閔党争 |
| 第一節 超日王時代 | 第十六章 高麗衰亡及朝鮮新国起 | 第四篇 最近世史 | 第二節 統前 |
| 第二節 戒日王時代 | 第一節 高麗外寇内乱 | 第一章 耶穌教人入印度 | 第十二章 日本条約改正及近世文化之速進 |
| 第三節 印度分裂及宗教之争 | 第二節 朝鮮李氏之興 | 第一節 葡萄牙人始來 | 第一節 各国議約 |
| 第二章 波斯大食之興亡及印度關係 | 第十七章 印度德里国起及鉄木耳之征略 | 第二節 英占印度海口 | 第二節 日本近世文化 |
| 第一節 回教興起 | 第一節 土耳其侵寇 | 第二章 莫臥兒帝国之衰乱 | 第三節 統前 |
| 第二節 回教徒侵略 | 第二節 蒙古侵寇 | 第一節 阿倫斯帝時情勢 | |
| | 第三節 回人攻畧印度大勢 | 第二節 中亜細亞辺寇 | |
| | 第十八章 安南黎氏起 | 第三節 英法戦争及東印度之割棄 | |

帰国後、河南省知県、江蘇諮議局議員を歴任。1902年に裘可桴が東林学堂を創設すると、俞復、吳稚暉とともに講師として招かれ、『蒙学東洋歴史教科書』『蒙学西洋歴史教科書』を編纂。また鄭孝胥、張謇等と上海で預備立憲公会を設立。中華民国成立後は、北京臨時參議院議員、江蘇第一高等審判庁監督推事、代理農商部次長、商標局初代局長等を歴任した。主著に『著作權律釈義』

(1911年)、『新刑律釈義』(1911年)、訳書に『日本商法論』(1913年)等がある⁹。

法政大学の記録に拠れば、秦瑞玠は法政速成科第3班を1906年11月に首席の成績で卒業したというから、少なくとも第3班が始まった1905年5月から卒業までの1年半は日本に留学していたに相違ない¹⁰。それ以前はおそらく、彼の郷里であり、近代教育の先進地であった無錫において、仲間とともに教育事業に奮闘していたのであろう。すなわち、呉敬恒(字は稚暉)や俞復によって1898年に創設された無錫三等公学堂は、無錫で最も早く設立された新式学堂の一つであったが、秦瑞玠もここで教壇に立っていたという¹¹。この学堂で編纂された『蒙学読本』は、中国の草創期の代表的教科書としてよく知られるものである¹²。また、この三等公学堂の教員であった俞復と丁宝書、さらに無錫出身の変法派官僚であった廉泉等によって1902年に上海に設立されたのが文明書局であり、上述の通り、この出版社から一連の「蒙学」教科書が出版されていた¹³。

次に、同書の「編輯大意」に拠れば、この書はインド、日本を中心とし、また時代を上世史、中世史、近世史、最近世史に分け、さらに「人種」や「国民思想」等に留意したという。「編輯大意」の冒頭では、以下の通り、同書がヨーロッパによる「東略」とそれに対抗する日本の動きに注目して編纂されたことが述べられている。なお、史料の引用に際し、漢字の旧字体は通用する字体に改め、適宜句読点と読みがな、〔 〕書きの語釈を補った(以下、同様)。

亜洲の土に国たる者、中国より外、開化の早きは、印度に如くな^し。立国の久しきは、日本に如くな^し。印度は宗教盛行^{にわか}し、日本は文化驟に進^{とも}み、歴史上に於いて俱に特異の点あり。欧人東略し、五印度〔東印度、北印度、西印度、南印度、中印度〕亡び、而して安南、緬甸之に繼ぐ。日本独り蕞爾^{さいじ}の島国を以て、能く振作自強し、世界の第一等国と頗頗〔拮抗〕と為し、其の間の源流情勢及び廢興存亡の機、殊に忽せにするを容れざるなり。故に本国歴史より外に、復た輯めて是の編を為し、名づけて外国歴史東洋之部と曰う。

さらに、同書の目録(表1)からは、上述の通り、本文が篇、章、節によって分けられ、いわゆる章節体が採用されていること、さらに時代区分がなされていることを見て取ることができる。伝統的な紀伝体や編年体と区別されるこの章節体は、日本の那珂通世『支那通史』(原書1888-90年、漢訳本1899年)を通じて中国へと伝えられたという¹⁴。同書がこの章節体を通じて時代区分を

⁹ 無錫文庫第五輯編写組編著『(無錫文庫第五輯)近現代名家名著存目』(鳳凰出版社、2012年)、72-75頁より抄録。

¹⁰ 法政大学史資料委員会編『法政大学史資料集 第十一集(法政大学清国留学生法政速成科特集)』(法政大学、1988年)、149、263頁。

¹¹ 陳宝善「無錫最早創辦的小学之一—三等学堂—」(中国人民政治協商會議江蘇省無錫市委員会文史資料研究委員会『無錫文史資料』13、1986年)。なお、『蒙学中国歴史教科書』(1903年)の編者丁宝書も秦とともに三等公学堂の教壇に立っていたという。

¹² 『蒙学読本』については、石嶋『百年中国教科書憶』(知識産権出版社、2015年)、63-74頁等参照。

¹³ 周利栄「文明書局考」(『出版史料』2、2007年)。

¹⁴ 周予同「五十年來中国的新史学」(1941年、今朱維鈺編『周予同経学史論著選集』、上海人民出版社、1983年)、535頁。ただし、つとに『万国通鑑』(1882年)といった欧米の宣教師が著した著作に章節体が現れていたという指摘もある。李孝遷『西方史学在中国的傳播(1882-1949)』(華東師範大学出版社、2007年)、1-41頁。

行っていることは、「中国二十四史、一朝を以て一史と為す。たとい『通鑑』の如き、号して通史と称するも、然れども其の時代を区分するは、周紀、秦紀、漢紀等を以て名づく。是れ中国前輩の脳識、只だ君主あるを見て、国民あるを見ざればなり」という「新史学」の批判意識を同書もまた共有していたことを示している¹⁵。

以下、同書の内容を見ていくこととしたいが、その際、特に同書がいかなる文献を参照しながら編纂されたかに留意し、それら文献との比較を通じて考察を進めたい。

2. 2. 秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』と日本の教科書

秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』には、参照した文献に関する言及はない。しかし、巻首には「文明書局 編訳」と見え、この書が少なからず翻訳を含んでいたことを窺わせる。果たして、同書はいかなる文献を参照しながら編纂されたのか。

ここで考えるべきは、日本の日本史教科書および東洋史教科書である。日清戦争以降、改革を本格化させていった中国が目に向けたのは、明治日本であった。地理的に近く、言語も学びやすかった日本の近代化の経験は、中国で大いに参照されたのである。『蒙学東洋歴史教科書』の著者秦瑞玠が同書の執筆のために参照した文献も、日本書が中心であったと見てよいだろう¹⁶。

そこでまず、日本史教科書について考えるならば、参照された可能性が高いのは、翻刻や漢訳によって当時すでに中国に将来されていた日本書¹⁷、ないしは当時日本で出版され、中国人留学生によって参照されたであろう日本史教科書である。こうした書籍を探ったところ、部分的に参照されたであろう書籍として、以下の書を見出すことができた¹⁸。

¹⁵ 梁啓超「中国史叙論」（1901年、今同『飲冰室合集』1、中華書局、1989年）、11頁。よく知られるように、「新史学」を唱えた梁啓超は、歴史は「国民之明鏡」「愛国心之源泉」であり、「人間一二有権力者興亡隆替之事」「一人一家之譜牒」ではなく「人間全体之運動進歩」「国民全部之経歴」を記すべきと訴えていた。梁啓超「新史学」（1902年、今同前）、1頁、同前梁啓超「中国史叙論」、1頁。

¹⁶ 秦瑞玠が日本に留学するのは、前述の通り、『蒙学東洋歴史教科書』が出版された後のことである。しかし、無錫では先述の三等公学堂と並ぶ最初の新式学堂の一つ埃実学堂が1900年に日本語教習松本某を招聘した頃から、地域レベルで日本留学が推進されるようになり、早稲田大学に留学した楊蔭杭等を嚆矢として、1902年にはすでに30数名が日本へと留学していたという。秦瑞玠はこうした中で、ある程度日本語と日本書に接近しえたのではないかと推察される。高田幸男「清末地域社会と近代教育の導入—無錫における「教育界」の形成—」（神田信夫先生古稀記念論集編纂委員全編『神田信夫先生古稀記念論集 清朝と東アジア』、山川出版社、1992年）、537-538頁。

¹⁷ 当時の中国では、徳川光圀『大日本史』、頼山陽『日本外史』をはじめ、小西惟冲編『日本編年史』（1883年）、石村貞一編『国史略』（同年）といった漢文で書かれた日本書が将来されていた他、萩野由之『日本歴史』（1896年、漢訳本は1901年）といった日本語で書かれた歴史書もすでに漢訳されていた。顧燮光『訳書経眼録』（1934年、のち王韜、顧燮光等編『近代訳書目』、北京図書館出版社、2003年）、418-421頁、張曉編著『近代漢訳西学書目提要—明末至1919—』（北京大学出版社、2012年）、370-373頁。

¹⁸ 本多の教科書が秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』によって参照されたと考える理由は、例えば、以下のような記述の類似が見え、それが他の教科書には見えないからである。

西郷隆盛既罷職、聚旧藩壯士二万人、四方仰其威望。及是举兵鹿兒島、要求立憲（立法以定君之権限）、王師征討、歴八月乃平、隆盛兵敗自殺。其党為之報仇、刺殺大久保利通。二人俱負重望、得民心、与木戸孝允（亦於是役卒）、稱為維新三傑。自此役後、憲法始萌芽焉。（秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』第4篇第6章第3節「鹿兒島之乱」）

本多浅治郎著『新編日本歴史』上下巻、内田老鶴圃、明治33年（1900年）印刷・発行

本多浅治郎著『新撰日本帝国史』、宝永館、明治35年（1902年）印刷・発行

本多浅治郎は、早稲田大学で教鞭を執り、同大学の清国留学生部の授業を担当した人物である¹⁹。日本史よりもむしろ西洋史が専門であったようで、彼の著書『新編西洋歴史教科書』（開盛堂、1899年）は、当時、中国の改革をリードした梁啓超によって、「其の叙事は条分縷析〔一条一条明析で〕、眉目最清にして〔要点がはっきりしていて〕〔中略〕之を読むに人をして厭を生ぜしめず」「大抵日本人の著わす所の西洋史、吾が国教科の用に充つべき者、此の書より良きなし」と称され、当時すでに上海広智書局で翻訳出版されていたという²⁰。当時の中国人留学生がこうした本多の日本史教科書に関心を抱いたとしても不思議はない。なお、当時の早稲田大学には、無錫の日本留学の嚆矢となった楊蔭杭や同族の秦毓璽が在学しており、こうした人脈を通じて、本多の書が無錫にもたらされたのではないかと推測される。

以下、秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』の日本史認識がよく表れている第1篇第9章「日本古代文化」を本多の教科書と対照させながら見ることとしたい。まず、「日本古代文化」を原文のまま示すと、以下の通りであった。なお、下線は引用者による（以下同様）。

日本古時、武功粗著、文化無足言、及三韓征定、百濟使王仁来聘、以論語千字文至、皇太子師之、日本有文字儒学始此。後百濟復遣使貢仏像仏經、大臣曾我氏奉之、日本伝仏教始此。蓋当中国兩晋以後、日本与百濟交通最密、不独文化頼以伝入、即縫織及陶器木工絵画等術、亦由之而得所師法、然其源固皆出於我中国也。

次に、本多浅治郎『新編日本歴史』第1篇第4章第3「三韓征伐の結果 儒学の伝来」、同篇第7章第3「韓土伝来の工芸及帰化人」および同篇第8章第1「仏教の伝来」の該当箇所を示すと、以下の通りである²¹。なお、引用に際しては、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた（以下同様）。

三韓内附の結果、種々ありと雖、其最著きは儒学の伝来なり。応神天皇十五年、百濟の阿直岐朝貢せしが、能く經典を読むを以て、皇子稚郎子就きて学び、其勧めによりて更に王仁を召す。翌年、王仁は韓の鍛冶、呉服、造酒等の技士を率いて来朝し、論語及千字文を献ず。稚郎子また之を師として学び、深く經義に通じ給えり。

陸軍大将西郷隆盛征韓の議論合ずして朝を退くや、〔中略〕旧藩の少年二万余人を養ひ、四方不平の徒常に其動静を伺ひ、〔中略〕隆盛を擁して兵を挙げ、〔中略〕〔天皇〕征討の令を下し給えり。〔中略〕隆盛、利秋等城山に自刃し、大乱全平ぎ、〔中略〕陥落に至るまで二百余日を費し、〔中略〕大久保利通は非征韓論の首謀者を以て目せられ、翌年五月、兇徒島田一郎等に刺殺せらる。隆盛、〔木戸〕孝允、利通は共に復古の鴻業を翼賛して大功あり、維新の三傑と称せらる。（本多浅治郎『新撰日本帝国史』第20章「熊本及萩の暴動、鹿兒嶋の乱」）

なお、本多の早稲田大学の講義録がより直接的に参照されたと推測されるが、今後の調査に期したい。

¹⁹ 吉岡英幸「早稲田大学清国留学生部―そのカリキュラムと日本語教師―」（『講座日本語教育』29、1994年）、96-97頁。

²⁰ 梁啓超「東籍月旦」（1902年、同『飲冰室合集』1、中華書局、1989年）、91頁。

²¹ 上巻、21、33、35頁。

応神天皇の時、儒学の伝来と共に縫織工、鍛冶大工、造酒等も渡来しけるが、更に使いを支那に遣はして工女を求め給いければ、爾来、工芸、著く進歩し、雄略天皇の朝には、絵画工、楽工も来たり、土器は陶器となり、織物は錦綺を出すに至りぬ。

欽明天皇の十三年に至り、百済より仏像及經文を奉りぬ。是仏教伝来の始なり。

このように両者の文言は必ずしもよく一致するわけでないが、秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』が中学教科書であった本多『新編日本歴史』等諸書の要点を拾い、潤色を加えながら書かれたと推測できる。もっとも、下線部「其の源固より皆な我が中国に出づるなり」という本多『新編日本歴史』には見られない記述もあり、東アジアにおける中国の文化の中心性が強調されたものと読むことができる。

一方、東洋史教科書については、ここでも漢訳によって中国に将来されていた日本書を中心に探ったところ、以下の書を見出すことができた。

桑原隲藏著『中等東洋史』上下巻、大日本図書、明治31年（1898年）印刷・発行

桑原隲藏は、緻密な実証主義と東西交渉史等における顕著な業績によって、アカデミズムの世界でよく知られる人物である。しかし、歴史教育の世界においても名著とされる『中等東洋史』をはじめ影響力のある教科書を数多く著しており、疑いなく中心人物であった。しかも桑原の教科書は日本でよく用いられただけでなく、中国でも数多く翻訳され、大きな影響力を有していた²²。こうした桑原『中等東洋史』と秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』とを読み比べてみれば、後者の随所に前者を参照した痕跡を見出すことができる。以下、同様に秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』の日本史認識がよく表れている第2篇第4章「日本中世文化」を桑原『中等東洋史』と対照させながら見ることとしたい。まず、「日本中世文化」を原文のまま示すと、以下の通りである。なお、原文に附された割注は省略した。

自朝鮮半島為唐所征服、中日両国之交際漸密、日本慕唐室富盛、屢遣僧侶儒士、留学於唐、採取中国制度文物、帰而一切皆倣効之。如官制依六典、刑法用唐律、田賦丁役用租庸調法、此類皆是、日本文化因之大進。其留学於中国、而最著名者、儒士則有吉備真備、僧侶則有最澄、空海等、俱能吸取他国文明、輸入本国、極有功於進化。

次に、桑原『中等東洋史』上巻、中古期第8篇第2章「隋、唐と朝鮮との関係及百済、高句麗の滅亡と新羅の一統と」の該当箇所を示すと、以下の通りであった。

隋唐の際、支那と朝鮮との関係漸く繁く、従うて我国との交通も亦、頓に盛大となる。〔中略〕唐興るに及んで、其の国勢の富強にして、文物の燦然たるを聞き、歴朝遣唐使をおき、盛んに使聘を通じ、制度文物一に彼に倣う。当時僧侶、学生の唐に留学する者頗る多く、道昭、最澄、空海等入唐して仏法を伝え、粟田真人、吉備真備、阿部仲麻呂等入唐して、儒学を修

²² 註2に同じ。桑原『中等東洋史』の最初の漢訳書である樊炳清訳『東洋史要』は、1899年に東文学社から印行されている。

め、時に或は唐朝に仕えて、高官を拝する者あるに至る。唐の末世に及んで、其国運の衰頹するや、菅原道実、宇多天皇に奏して、遣唐使を罷む。爾後僧侶、商賈の支那に来往する者仍お絶えずと雖ども、両国国際上の交通は、是に至りて長く廃絶せり。

この両者の文言も全く同じというわけではないが、大筋において一致していることを見て取ることができよう。しかも、ここにも下線部「能く他国の文明を吸収し、本国に輸入し、極めて進化に功有り」という桑原『中等東洋史』には見えない記述が加えられており、日本が他国から文明を輸入し、進化に役立ったと肯定的に述べられている。

最後に、これもまた秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』の日本史認識をよく示す第4篇第12章第2節第3節「日本近世文化」を見ることとしたい。ただし、ここには本多『新編日本歴史』および桑原『中等東洋史』が参照された痕跡を見出すことはできない。その原文を示すと、以下の通りであった。

日本歴世重神事、尚武俠、其文化多自外輸入、大抵唐宋盛時、多倣法於我中国、時則漢学漸興、及欧美諸国強盛、又事事步趨西洋、於是蘭学復起、由其善於变化、故学業之進歩甚速。

当徳川氏季世、源光國等精於漢学、著日本史、一義主尊王、遂成日後覆幕之功。福澤諭吉設立義塾、教西学、印行平易有益之書、有功於維新者亦多。惟西洋功利之説盛、而道德漸衰。於是

有唱保存国粹（保国家原有之精粹）主義、復興漢学者。要之明治富強皆學術興盛所致也。

このように、ここでもまた日本がよく変化して、学業の進歩が速いことが評価され、日本の「富強」の所以が學術の隆盛にあったとされる。これは本多浅治郎『新撰日本帝国史』が水戸光圈『大日本史』以来の「尊王攘夷」と洋書輸入の解禁による「和親開国」の両主義が合して一団となって維新をもたらした、とする議論を彷彿とさせるが²³、安易な受け売りではあるまい。むしろこれは、中国同様古くからの文明国であったインドが植民地化され、小国であった日本が変化して富強を遂げたことを率直に評価し、中国の変化を求める切実な訴えであっただろう。

総じて、秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』は、中国が伝統的に東アジアの文化の中心であったことを強調しつつも、それ以上に、中国の変化を切実に求める立場から、日本が他国の文化を摂取し、明治以降大きく変化したことを高く評価するものであった。こうした同書と日本の歴史教科書との間に、大きな歴史認識の相違はなかったといえよう。

3. 商務印書館編訳所編『最新東洋歴史教科書』

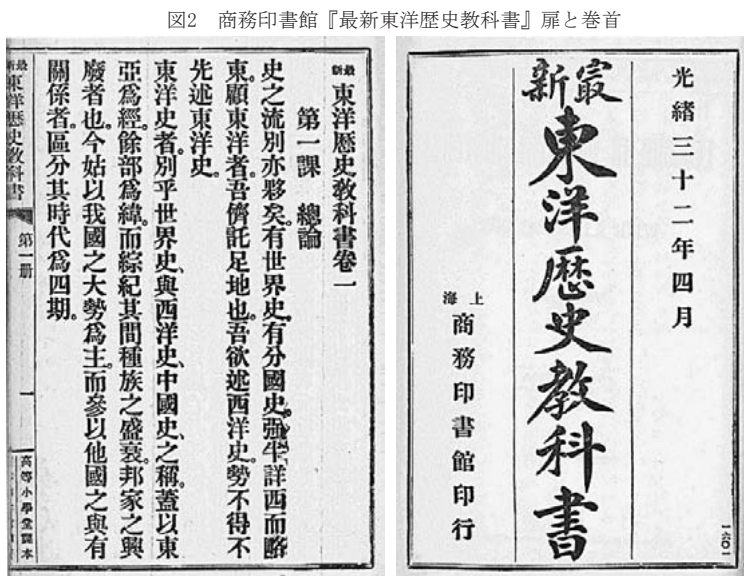
3. 1. 『最新東洋歴史教科書』と商務印書館編訳所

この書は、光緒30年（1904年）12月初版、同32年5月2版、編纂者が商務印書館編訳所、発行者

²³ 本多浅治郎『新撰日本帝国史』、93-109頁。

が上海商務印書館であ

る²⁴。全2冊2巻の石印本で、編輯大意、目次、本文から成り、本文は巻1と巻2の併せて80課から成る(表2)。この書の本文にも随所に人物の挿絵や地図が配されている。書名に見える「最新」は、同書が当時商務印書館から発売されていた一連の「最新」教科書中の一書であることを示してい



(出処) 筆者蔵本

る。「最新」教科書シリーズは、「盛行すること十余年、行銷すること数百万に至る」と言われた通り、清末期におけるベストセラー教科書であった²⁵。この書は『蒙学東洋歴史教科書』とは異なり、1906年に学部によって示された「学部第一次審定初等小学暫用書目」にも採録されていた。ただし、審定時の学部による評語に拠れば、同書は高等小学用の教科書として編纂されたものの、高等小学には「中国歴史」しか設置されていなかったため、中学3年後期、4年前期の「亚洲各国及東洋史」用教科書として指定されたようである²⁶。

編纂者の商務印書館編訳所は、1902年に設立、所員の一人であった蔣維喬の回想に拠れば、当時、同所では「最新」教科書の編纂のため、所長張元済のもと、「合議制」に基づき、編纂の「根本計画」が練られたという。一つの原則のためにまる一日議論することもあったといい、こうした編纂業務を担ったメンバーは、張元済、高鳳謙、蔣維喬、莊愈の他、長尾楨太郎(号は雨山)、小谷重と通訳劉崇傑の7名であったという²⁷。

長尾は元高等師範学校教授、文部省図書審査官、小谷も元文部省図書審査官、金港堂社員であった。このように日本人が加わっていたのは、当時、商務印書館と日本の教科書出版の大手金港堂が

²⁴ 筆者所蔵本は奥付が欠落しているため、王有朋主編『中国近代中小学教科書総目』(上海辞書出版社、2010年)、222頁に拠った。第2版の発行年は光緒32年4月と疑われるが、ひとまず同目録に従った。なお、同目録では同書の書名として封面に見える「最新高等小学東洋歴史教科書」が採られているが、本稿では巻首に見える「最新東洋歴史教科書」を採った。

²⁵ 蔣維喬「編輯小学教科書之回憶」(『出版週刊』156、1935年、のち張静廬編『中国出版史料補編』中華書局、1957年)、145頁。

²⁶ 「審定書目」(『学部官報』23、1908年)、7丁。

²⁷ 前掲蔣維喬「編輯小学教科書之回憶」、また拙稿「清末の修身教科書と日本」(並木頼久・大里浩秋・砂山幸雄編『近代中国・教科書と日本』、研文出版、2010年)参照。

合弁関係にあったからである²⁸。要するに、『最新東洋歴史教科書』は、日中の共同編纂になったものであり、後述する通り、同書にはこの合弁関係に基づいて編纂された痕跡が認められる。

次に、同書の「編輯大意」に拠れば、第一条で「此の編名づけて東洋史と為すは、本国史より別ちて言う所以なり。各国事実も亦た煩雑を極むれば、小学の計が為め、其の要を列举し、大略を知らしむのみ」と述べられ、この書が大略を述べたに過ぎないという。また第三条では「泰東各国、之を

表2 『最新東洋歴史教科書』目次

| 卷一 | 卷二 |
|--------------------|-----------------------|
| 第一課 総論 | 第四十一課 唐伐高麗滅百濟 |
| 第二課 地勢 | 第四十二課 唐滅高麗 |
| 第三課 人種 | 第四十三課 渤海国之興衰 |
| 第四課 匈奴之興 | 第四十四課 新羅後百濟併於高麗 |
| 第五課 西域始通中国 | 第四十五課 高麗与宋遼和戦 |
| 第六課 匈奴之衰 | 第四十六課 漢学仏教初入日本 |
| 第七課 漢馭匈奴 | 第四十七課 日本与唐通好及藤原氏擅政 |
| 第八課 東漢時之匈奴 | 第四十八課 交趾始建国丁黎代興 |
| 第九課 安南之始 | 第四十九課 交趾黎氏亡李氏興 |
| 第十課 交趾之叛服 | 第五十課 波斯哥疾甯朝侵印度 |
| 第十一課 印度之始 | 第五十一課 哥疾甯朝衰色舒格朝興 |
| 第十二課 印度被侵 | 第五十二課 色舒格朝与十字軍戦争耶路撒冷 |
| 第十三課 印度分裂 | 第五十三課 色舒格朝高麗朝併於花刺子模 |
| 第十四課 仏教初興 | 第五十四課 印度巴瑪尼朝特拉克朝 |
| 第十五課 印度統一 | 第五十五課 元太祖滅花刺子模 |
| 第十六課 印度復分 | 第五十六課 元太祖征札蘭丁 憲宗伐交趾大食 |
| 第十七課 仏教伝入中国 | 第五十七課 元世祖伐緬甸占城安南 |
| 第十八課 朝鮮之始 | 第五十八課 元世祖伐高麗日本 |
| 第十九課 新羅高麗百濟 | 第五十九課 日本藤原氏後之執政 |
| 第二十課 高麗来侵 | 第六十課 明成祖伐安南 |
| 第二十一課 晋代之高麗 | 第六十一課 帖木児国之興廢 |
| 第二十二課 日本建国 | 第六十二課 白拝耳建蒙兀爾国於印度 |
| 第二十三課 隋伐高麗 | 第六十三課 明伐緬甸 緬甸侵暹羅 |
| 第二十四課 波斯開国 | 第六十四課 日本伐朝鮮与明之交涉 |
| 第二十五課 波斯侵印度伐希臘 | 第六十五課 蒙兀爾帝国之盛衰 |
| 第二十六課 亜歷山大滅波斯 | 第六十六課 安南分裂 |
| 第二十七課 波斯分裂 | 第六十七課 英法通商印度 |
| 第二十八課 波斯中興 | 第六十八課 波斯内乱 |
| 第二十九課 回教初興 | 第六十九課 緬甸滅暹羅鄭氏復国 |
| 第三十課 回教徒建大食国 | 第七十課 英併印度 |
| 第三十一課 大食拓地 | 第七十一課 法侵安南 |
| 第三十二課 鄂密朝 | 第七十二課 俄侵波斯 英滅緬甸 |
| 第三十三課 大食亜巴斯朝 | 第七十三課 英俄争阿富汗 |
| 第三十四課 大食属地分裂 | 第七十四課 俄人侵中亚 |
| 第三十五課 突厥之興 | 第七十五課 日本覆幕排外 |
| 第三十六課 突厥分東西 | 第七十六課 朝鮮排外 |
| 第三十七課 突厥侵唐及其内乱 | 第七十七課 日本変法 |
| 第三十八課 突厥之衰 | 第七十八課 日本滅琉球 改約律 |
| 第三十九課 回紇滅突厥 黠戛斯滅回紇 | 第七十九課 中日争朝鮮 |
| 第四十課 吐蕃之興 | 第八十課 日俄之戦 |

古に証するに、中国と交流最も繁き者、土耳其族^{トルコ}に如く莫し。之を今に驗するに、黄人中の能く白人に抗う者、又た当に日本を以て先路の導きと為す。玆の編故に始めを獵狃^{けんいん}、匈奴に託し、而して日俄の戦^{ロシア}を以て之を殿す〔最後とする〕』と述べられ、日本が「先路の導き」とされる。この他、第七条では「此の編用うる所の参攷書十余種を下らず、務めて折衷至当を求むるも、然れども荒忽の処、恐るらくは尚お免れず」と述べられ、この書が少なからぬ参考書に基づいて書かれたとされ

²⁸ 両者の合弁関係については、樽本照雄『初期商務印書館研究』（清末小説研究会、2000年、増補版、2004年）参照。

る。

さらに、同書の目次（表2）からは、この書が『蒙学東洋歴史教科書』とは異なり、章節体が採用されず、課によって分けられただけであることがわかる。これは学堂の用に合致させようとした結果であろうが、このためにこの書の時代区分や地域区分を構成から読み取ることができなくなってしまう。しかし、その代わりと言うべきか、同書の第1、2、3課はそれぞれ「総論」「地勢」「人種」とされ、ここに同書の地域、人種および時代に対する見解が総論的に示されている。

以下、同書の内容を見ていくこととしたいが、ここでも同書がいかなる文献を参照しながら編纂されたかに留意し、それら文献との比較を通じて考察を進めたい。

3. 2. 商務印書館編訳所編『最新東洋歴史教科書』と日本の教科書

上述の通り、商務印書館編訳所編『最新東洋歴史教科書』は、その編纂の際、参照された書籍が十数種を下らなかったというが、それはどのような書籍であったのか。商務印書館に附設された蔵書楼である涵芬楼の新書目録には、東洋史類に分類される33種の書籍をはじめとして、関連する多くの書籍が著録されている。ここには出版年月も記されていることから、『最新東洋歴史教科書』が参照したであろうおよそその書籍を推測することができる²⁹。ここには日本書が含まれていないものの、漢訳本だけで5種7部が著録された書籍があった。それは、他でもなく、上述の桑原隲蔵の東洋史教科書である。『最新東洋歴史教科書』が主として参照したであろう書籍もやはり桑原の以下の書であった。

桑原隲蔵著『中等東洋史』上下巻、大日本図書、明治31年（1898年）印刷・発行

この桑原『中等東洋史』は、上述の通り、秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』もまた参照していた。しかし、商務印書館『最新東洋歴史教科書』は、より多くこの書に依拠していた。同書の第1、2、3課は、上述の通り、同書の地域、人種および時代に対する見解が総論的に示されていたが、それらはいずれもほぼすべてが桑原『中等東洋史』の「総論」、第1章「東洋史の定義及範囲」、第2章「地勢」、第3章「人種」、第4章「時代の区分」に依拠したものであった。また、その他の各課についても、その少なからぬ部分が桑原『中等東洋史』の関連箇所を抄訳したものである。そこで、以下、冒頭の「総論」について両者を比較してみることにしたい。まず、商務印書館編『最新東洋歴史教科書』第1課「総論」の原文を示すと、次の通りであった。なお、原文に見える割注と敬意を表す闕字は省略した。

史之流別亦夥矣。有世界史、有分国史、強半詳西而略東。顧東洋者、吾儕託足地也。吾欲述西洋史、勢不得不先述東洋史。

東洋史者、別乎世界史与西洋史、中国史之称。蓋以東亜為經、余部為緯、而綜紀其間種族之盛

²⁹ 商務印書館編『涵芬楼新書分類総目』（商務印書館、出版年不明、中国科学院図書館蔵）。

衰、邦家之興廢者也。今姑以我国之大勢為主、而參以他国之与有關係者、区分其時代為四期。

其一、自太古漢族拋中国北部地、經三皇五帝三代、而中央集權之基礎漸固、迨秦始皇帝出、遂建一統之治。〔中略〕是為上古期、漢族充腓時代。其二、自秦一統、洎〔及〕漢鼎盛、悉力攘外、後雖經五胡之乱、未幾而隋唐興、又復旧觀、以迄唐亡、凡千余年間、是為中古期、漢族全盛時代。其三、自五季〔五代〕至明末、凡七百年間、漢族之勢日衰、異族迭盛。〔中略〕是為近古期、蒙古族極盛時代。其四、自国初至今、凡三百年間、西人之東航者日多、〔中略〕東亜大勢、幾全歸白種之掌握、是為近世期、歐人東漸時代。

次に、桑原『中等東洋史』、「総論」、第1章「東洋史の定義及範圍」の該当箇所を示すと、以下の通りである。

東洋史とは、主として東方亜細亜に於ける、民族の盛衰、邦国の興亡を明にする、一般歴史にして、西洋史と相並んで、世界史の一半を構成する者なり。〔後略〕

さらに、第4章「時代の区分」の該当箇所を示すと、以下の通りである。なお、原文の括弧書きは省略した。

〔前略〕今姑く支那本部の大勢を中心とし、之と關係せる周囲諸邦国の興亡、諸民族の盛衰に参考して、東洋史の時代を、左の四期に分つべし。

（第一）上古期 漢族膨張時代

太古より秦の一統に至る間をいう。此間に在りて、東洋史中一切の事変に於て、最も重要な位置を占むべき漢族は、支那北部の地に抛り、三皇五帝三代を経て、中央集權の基礎漸く固く、遂に秦の始皇帝出でて、始めて鞏固なる一統政治を建てたり。〔中略〕故に、姑く之を漢族膨張時代というべし。

（第二）中古期 漢族優勢時代

秦の一統より唐の滅亡に至る、凡そ千百年間をいう。〔中略〕漢族は、秦兩漢時代に於て、優に塞外諸族を圧倒し、五胡十六国の際と雖ども、尚よく之と頡頏し、隋唐時代に至りては、復又空前の大版図を開きしが故に、此間を漢族優勢時代というも、大不可なきものの如し。

（第三）近古期 蒙古族全盛時代

五代より清朝の興起に至る、凡そ七百年間を指す。此世紀に於て、漢族の氣焰全く沈降し、塞外諸族は次第に勢を得、〔中略〕故に此世紀を蒙古族最盛時代というべし。

（第四）近世期 歐人東漸時代

清初より現時に至る、凡そ三百年間、之を歐人東漸時代と云うべし。前世紀の終より、歐洲人士の東洋に遠航する者漸く多く、〔中略〕此の如くして阿利安人種^{アーリア}は、次第に東方亜細亜の大勢を左右するに至れり。

このように、冒頭の一段落以外は、商務印書館『最新東洋歴史教科書』がほぼ全面的に桑原『中等東洋史』に依拠していたことを見て取ることができる。時代区分もそのまま桑原のそれを踏襲し

ている³⁰。当時、同じ商務印書館から発行されていた『教育雑誌』所載の広告に拠れば、商務印書館『最新東洋歴史教科書』は、桑原の教科書が学堂の使用に適合しないために編纂されたとのことであり、以下の通り、桑原の教科書をかなり意識していたようである³¹。

学部審定 高等小学 東洋歴史教科書 二冊 定価大洋三角

近出東洋史訳本以桑原隲藏氏者為最著、然非教科書不合学堂之用、本館特輯此編、於五千年東洋各国之大勢瞭如指掌、洵為研究史學者必讀之書。〔後略〕

なお、商務印書館『最新東洋歴史教科書』の出版より後のことであるが、同じ商務印書館から、以下の通り、桑原『中等東洋史』の重訳本が出版されている。

日本桑原隲藏原著、山陰金為訳述『重訳考訂東洋史要』1冊、商務印書館、光緒34年（1909年）初版

この重訳本の「総論」第1章「東洋史之宗旨界説」の冒頭箇所を原文で示せば、以下の通りである。

曷言乎東洋史、抑東洋史何為而作、且於史体何居也。其諸壹以東亜為經、余部為緯、演繹其間種族之衰王〔旺〕、邦家之廢興、嶷然而与西洋史相班、劃然而斡世界史之半者也。〔後略〕

ここから見て取れるように、この重訳本たる金為訳述『重訳考訂東洋史要』は、桑原『中等東洋史』以上に、商務印書館『最新東洋歴史教科書』の記述に近似している。このことはさらに、この重訳書の「総論」第四章「区分時代」で、「上古棋 漢族充腓時代」といった商務印書館『最新東洋歴史教科書』と同じ訳語が用いられていることから窺うことができる³²。これより、重訳者である金為が商務印書館『最新東洋歴史教科書』の編纂にも関わっていたことが推測されるが、いまのところ詳細は不明である。

以上に見た通り、商務印書館『最新東洋歴史教科書』は、桑原『中等東洋史』に依拠しつつ、また桑原の漢訳本『東洋史要』も介しながら、学堂での課程に合致するように編纂されたものであった。著名な歴史学者、民族学者である黄現璠は、桑原の漢訳本『東洋史要』について、「名賢がみ

³⁰ 桑原『中等東洋史』の大きな特徴は、民族・人種間の勢力消長から歴史を把握しようとしていることであり、伝統的な中華王朝中心の歴史観とは大きく異なる。黄東蘭「東洋史の時空—桑原隲藏東洋史教科書についての一考察—」（愛知県立大学外国語学部『紀要 地域研究・国際学編』42、2010年）参照。こうした歴史観は、当時すでに進化論が流行していたなか、中国知識人にとって受け入れやすいものであったと思われる。また、「近世」を「欧人東漸時代」とするその時代区分も、当時の「瓜分」の危機を背景としながら、リアリティーをもって受け入れられたのではないか。ただし、桑原はこの時代において、「亜細亞大陸の大半は已に欧人の領土となれり。〔中略〕真の独立国の体面を具備せるものは、唯我が日本国あるのみ。我が国民の責任実に重大なり」と述べており、日本のアジアへの「雄飛」を暗に示唆していた。拙論「近代日本の東洋史教科書とアジア認識」（下定雅弘編著『中国と日本—相互認識の歴史と現実—』、岡山大学グローバル・パートナーズ、吉備人出版、2014年）。

³¹ 『教育雑誌』3巻13期、1911年。

³² 桑原『中等東洋史』のその他の漢訳書については、桑原隲藏著、樊炳清訳『東洋史要』巻上下（東文学社、光緒25年（1899年）序印）、桑原隲藏著、周同愈訳『中等東洋史』（上海文明書局、光緒30年（1904年）初版、光緒32年再版）を参照しえたが、訳語は異なっている。

な高く評価し、学生は競って拝読し、ほとんど一人が一冊を手にしていた」と述べている。しかし、また続けて、「これより、国人の歴史知識が日本人の下にあり、その由来がすでに久しいことがわかる。ああ、亡国は一道にあらず、救国もまた多端である。吾が国の史学家はいったい猛省しているのかどうか」とも述べていた³³。たしかに黄現璠が嘆いた通り、商務印書館『最新東洋歴史教科書』に中国側の視点が積極的に打ち出された痕跡を見出すことは難しい。

とはいえ、商務印書館『最新東洋歴史教科書』は、たんなる桑原『中等東洋史』のダイジェスト版でもなかった。そこには見えない日本史に関する記述が含まれているからである。果たして、これらの記述はいかなるものであったのか。ここでも、当時の日本書ないしその漢訳本が参照されていたと推測されるが、上述の通り、当時、商務印書館は日本の金港堂と合弁関係にあった。これをふまえ、『最新東洋歴史教科書』が参照したであろう書籍を探ったところ、以下を見出すことができた。

新保磐次著『日本歴史 初級用』巻1、2、金港堂書籍株式会社、明治35年（1902年）印刷・発行

新保磐次著『日本歴史 上級用』、金港堂書籍株式会社、明治35年印刷・発行

新保磐次は教科書執筆者として金港堂から多くの教科書を出版した人物である³⁴。彼の教科書が商務印書館『最新東洋歴史教科書』によって参照された理由は、商務印書館と金港堂が合弁関係にあったからに他なるまい。

それでは、新保『日本歴史』は具体的にどのように参照されたのか。その最も明白なものは挿絵である。商務印書館『最新東洋歴史教科書』は日本史に関する挿絵のほぼすべてをこの書から採っていた。図3は商務『最新東洋歴史教科書』巻1第22課「日本建国」、巻2第47課「日本与唐通好及藤原氏擅政」と新保『日本歴史 初級用』巻1第1編第2章「神武天皇」、第3編第2章「嵯峨天皇 入唐の高僧及び新宗派 漢文学及び学校の設立」のそれぞれの挿絵（神武天皇と空海）を比較したものであるが、両者は一見して全く同じである。なお、神武天皇の挿絵は1890年に竹内久一によって製作された「神武天皇像」を描いたものであり、明治天皇の面貌を持つこの像は万世一系を象徴する当時の代表的な神武像であったという³⁵。

もっとも、本文について見れば、商務印書館『最新東洋歴史教科書』が新保『日本歴史』に依拠していたとは見なすことができない。むしろ日本史認識については、商務印書館『最新東洋歴史教科書』は独自の視点を打ち出そうとしていたように見える。例えば、巻2第47課「日本与唐通好及藤原氏擅政」の原文を示すと、以下のようであった。

³³ 黄現璠「最近三十年中等学校中国歴史教科書之調査及批評」（『師大月刊』5、1933年、のち黄現璠『古書解読初探—黄現璠學術論文選—』、広西師範大学出版社、2004年）、7頁。なお、ここでいう「名賢」とは、当時、梁啓超が桑原『中等東洋史』を高く評価していたことがよく知られていよう。梁啓超「東籬月旦」（1902年、同『飲冰室合集』1、中華書局、1989年）、98頁。

³⁴ 竹田進吾「新保磐次と歴史教科書」（『近代史料研究』11、2011年）参照。

³⁵ 千葉慶「近代神武天皇像の形成—明治天皇＝神武天皇のシンボルイズム—」（『近代画説』11、2002年）。

日本遣使我国、相伝始於崇神帝時、而史無可徵。東漢時有委奴国者、屢修貢、然亦日本所属之一部、非其王室也。三国時、嘗有使者至吳魏、而交通未盛。暨隋氏統一、日本推古帝在位、通使於隋、遣其儒士直福因等、至中国留学。及唐貞觀初、舒明帝立、時福因等学成、先後帰国、具道唐富盛、舒明帝因遣犬上御田鋤等、使於唐、太宗厚遇之、及田鋤等還、復遣使衛送至難波（今大阪）、自是日本屢遣使至唐。

高宗時、日本齊明帝立、令僧知通知達、就唐元奘習仏典、其先踵至者、以阿部仲麻呂及吉備真備、空海為最著。吉備真備留学中国、凡十八年、相伝其帰国後、就中国字書偏旁、作片仮名、空海又就中国草書、作平仮名、今日人所通用者是也。於是日本之制度文物、一仿唐制。至唐末、兩國交際始絶。

〔後略〕

このように同書は比較的系統的に日中交流の歴史を述べている。新保『日本歴史』ではそもそもこのようなまとまった記述すら見い出すことができない。遣隋使・遣唐使についての断片的な記述を拾えば、「此の御時は支那の隋の世にして我が国より始めて遣隋使を遣わされき。我が国と支那との交通は古くよりの事なれど、朝廷と朝廷との間の交際は此の時を始めとす。我よりの国書には「日出処天子致書日没処天子」などいい、今の詞にていえば「国家対等の礼」を用いられき」「唐よりは使者来朝して好しみを修めければ両国の交通は益々盛んなりき」等と述べられており³⁶、両

図3 商務『最新東洋歴史教科書』（左）と新保『日本歴史』（右）



³⁶ 新保磐次『日本歴史 初級用』巻1、24-25、30頁。

図4 桑原隲藏著、金為詠述『重訳考訂東洋史要』

者の関係の対等性が強調されるばかりか、あまつさえ逆転されようとしている。商務印書館『最新東洋歴史教科書』の記述は、むしろ前章で引用した桑原『中等東洋史』上巻、中古期第8篇第2章「隋、唐と朝鮮との関係及百濟、高句麗の滅亡と新羅の一統と」の記述に基づき、さらに内容を補充したものと推測される。この点をいささか裏付けるもの



(出処) 中国国家図書館蔵本

として、上述の桑原『中等東洋史』の重訳書たる金為詠述『重訳考訂東洋史要』の該当箇所には、商務印書館『最新東洋歴史教科書』と同じ空海の挿絵が配されている(図4)。なお、ここにはまた「阿倍仲麻呂」とされる人物の挿絵も配され、これもまた新保『日本歴史』から採られたものに相違ないが、新保の書では和歌の高名な歌人「柿本人麻呂像」として掲げられるものである。

このように、商務印書館『最新東洋歴史教科書』からも中国が伝統的に東アジア世界で文化的中心であった自負を読み取ることができる。しかし、同書の近代についての記述は、むしろ複雑な心境を窺わせるものであった。編輯大意で日露戦争に勝利した日本は「黄人」中の「白人」に抗う「先路の導き」と称されたが、同書を締めくくる第80課「日^{ロシア}俄之戦」では、論評は慎重に避けられるものの、いわゆる満州善後条約によって日本が旅順の租借権や東三省の鉄道敷設権、森林伐採権を獲得していったことが特に提起され、以下のように締めくくられる。よもやこれを日本に対する称賛と読むことはできまい。

光緒二十九年、日人首攻俄軍於旅順、敗之、尋又逐駐韓之俄兵。於是日人益激昂、童稚婦女、皆鋤蓄^{バルチック}〔蓄えを寄付し〕、助軍資、卒以陷旅順、入奉天、俄遣波羅的海艦隊東來、復為日艦隊所殲。於是美總統願為調人、両国乃遣專使議和、議成。日本復以專使來、与我立正約三条、附約十二条、除統祖旅順外、又得東三省鉄道敷設権、森林伐採権。時光緒三十一年、西歷九百六年也。

総じて、商務印書館『最新東洋歴史教科書』は、日中共同編纂に成ったということもあつてか、秦瑞玠『蒙学東洋歴史教科書』以上に日本の教科書に多く依拠していた。しかし、日露戦争に勝利した日本を「先路の導き」とする一方、中国が伝統的に東アジアの文化的中心であったことへの自負および「満洲」や韓国に勢力範囲を拡げる日本に対する複雑な思いが読み取れる。つまるところ

ろ、日中共同編纂になったとはいえ、両者の歴史認識は必ずしも一致していなかったのではないか。

おわりに

以上、本稿では清末期に編纂された「東アジア史」教科書について、その内容や編纂の背景を探ってきた。当時、日本の近代化の経験が中国でさかんに参照されたため、これらの教科書もまた日本の教科書を大いに参照しながら編纂が行われた。こうして編纂された「東アジア史」教科書は、時に中国が伝統的に東アジアの文化的中心であったことを強調しながらも、それ以上に中国の変化を切実に求める立場から、日本の明治維新以降の変化を高く評価し、基本的に日本の教科書とのあいだに歴史認識上の相違はなかった。とはいえ、これらの教科書が日本の教科書を単に引き写したというわけではなく、とりわけ、日露戦争以降、日本が「満洲」や韓国に勢力範囲を広げると、これら教科書は複雑な思いを行間に滲ませたのである。

こうした複雑な思いは、こののち日本が第一次世界大戦の中、青島を占領し、対華21か条要求を突きつけ、中国への野心をあらわにしていく中で大きく膨らみ、終には教科書間の歴史認識の相違となって現れてくるに違いない。民国期における「東アジア史」教科書や世界史、外国史の教科書中の日本史認識に、そうした変化がどのように現れてくるのか、一方でそうした動きに対し、日本は「満洲」等の植民地・占領地においていかなる「東アジア史」教育を展開するのか、これらの問題については稿を改めて考えることとしたい。

〈謝辞〉

本稿の作成を進める上で、首都師範大学石鷗教授、東北師範大学徐冰教授から資料の提供を受けた。ここに記して謝意を表したい。

また、本研究はJSPS科研費 JP16K03086の助成を受けたものである。